

## 地名の歴史と由来／天沼編

幸田有美子(杉並区立郷土博物館分館)

### 「天沼」にまつわる史料

江戸時代中期より、杉並区域は20ヶ村に分かれ、その一つに天沼村がありました。「天沼」の村名は、寛永12年(1635)6月17日付の「徳川家光朱印状」によって確認ができます。これは天沼村が堀之内村、阿佐ヶ谷村と共に、徳川幕府の直轄神社・日枝山王社(千代田区)の社領に定められ、天沼村の村高は119石余であったことがわかる史料です<sup>(註1)</sup>。



画・矢嶋又次「天沼弁天池」杉並区立郷土博物館所蔵  
池には蓮の花が咲き、鯉などが棲む美しい湧水池だった。

その他に、時代は遡りますが奈良時代にも「天沼」の地名に関する一説があります。それは768年、『続日本紀』にみえる武蔵国の国府(現在の府中市)を結ぶ道に設置した「乗瀦」あまりぬま・あまぬま駅が今の天沼辺りにあったとする説で、いまだ結論に至っていません。

### 水辺の面影

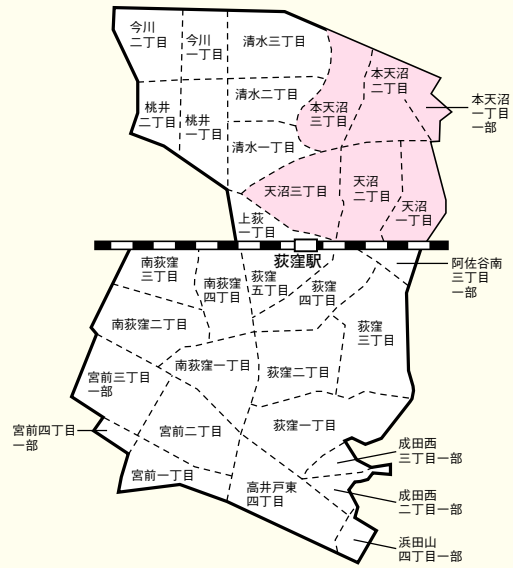
かつて天沼3丁目には天沼弁天池がありました。この池は、地下水堆<sup>(註2)</sup>の中心にある湧水池です。江戸時代以前の天沼村について『武蔵名勝図会』<sup>(註3)</sup>には、「古名雨沼と書く。天正(1573~92)年中より以来は今の文字を用ゆ。この村内は往古大いなる沼池ある」と書かれ、降雨によって沼池化する土地柄を想像できます。また、「浄水



「昭和37年撮影 天沼弁天池」杉並区立郷土博物館所蔵  
中の島にある弁天社に続く橋上で釣りを楽しむ子どもたち。

から地名や伝説を辿ると、天沼、清水、和泉等は、いずれも地下水又は湧水が地名の起こりをなしていると推定される<sup>(註4)</sup>ことから、前の「雨沼」は天沼弁天池を連想させます。

時を経て、桃園川源流と言われた天沼弁天池は、昭和40年代初めに枯渇し埋められました。かつて、青梅街道沿いの千川上水と交わり田畠を潤した桃園川も暗渠化し、人々の生活と結びつく天沼一帯に見えた水辺の面影は消え、池のあった場所は今や公園として人々の憩いの場へと姿を変えています。



現在の「天沼」  
※当センターの対象地域を示しています。

(註1)「日枝神社」のHPにて朱印状が見られます。

(註2) 地下水面が一部盛り上がり塚状をなす形態を指す。天沼弁天池を中心とした地下水堆については、「東京市西部井荻天沼地下水堆」(吉村信吉、1940)などがある。

(註3) 植田孟縉編集、文政6年(1823)大学頭林銜に献上された。

(註4) 杉並区教育委員会「文化財シリーズ19 杉並の地名」